

## ワーク・チームにおけるソーシャル・キャピタルの形成過程とその機能

山 口 生 史

この研究においては、組織の重要な資本となりうるソーシャル・キャピタル (Social Capital) がワーク・チームという活動を通して形成可能なのか、形成可能だとすれば、どのようなプロセス

を得て形成されるのか、そして、その機能はいかなるものかに焦点を絞っている。2007 年度は、このテーマに関して、文献調査を中心に研究を進めながら、学会での発表や執筆を通じて、テーマに関連する部分の洞察を深めた。以下に、この 1 年で、それらの研究活動（それぞれ一部のみ下記に報告）を通じて得た知見を報告する。

ソーシャル・キャピタルに関しては、組織の中での構築が本研究のテーマであることから、組織論の視点を十分取り入れた文献として Peter R. Monge & Noshier S. Contractor (2003) の *Theories of communication networks* が重要であった。本書からは、様々な組織論と様々なネットワーク理論の関連について理解を深めた。自己管理型チームを組織内に構築するには、どのようなネットワーク理論がその適切な視点となるかが明確になりつつある。また、Nan Lin, Karen Cook, & Ronald, S. Burt (2007) の *Social Capital: Theory and research* は、Baker (2000)、Cohen & Prusak (2001)、Gabbay & Leeenders (2001) 同様、組織内のソーシャル・キャピタルに焦点をあてており、多くの知見を得た。さらに、Christiaan Grootaert et. al. (2004) の *Measuring social capital: An integrated questionnaire* は、サーベイをするための質問項目集であり、将来の調査に大きな参考になった。

ソーシャル・キャピタルを構成する重要な概念の一つは、信頼 (trust) である。組織内に信頼を構築することはソーシャル・キャピタルの組織的構築において必要条件となる。信頼を形成する組織内コミュニケーションの機能に関して、07.7.12 開催されたオランダ・グローニンゲンでの国際学会 (International Association for Intercultural Research) での研究論文発表（この論文のテーマは本研究とは異なるものであったが）のために行ったデータ分析の結果、信頼と組織コミュニケーションの直接的・間接的関連を発見した意義は本研究にとって大きい。大会で海外の研究者から得たコメントなどは、本研究を進めるに当たって大きく役立っている。また、某新聞上の 2007 年 7 月～12 月の 24 回 (週) 連載執筆 (1 回 2900 字) のなかに、自己管理型チームとソーシャル・キャピタルについて論じた回が数回あった。この執筆は、学術的なものではないが、執筆を通して、本研究のテーマであるチームとソーシャル・キャピタルの関係がよく整理でき、明確にすることができた。

研究活動を通して、2008 年度の研究の基盤ができた。2008 年度は、本研究テーマをさらに発展させる。